



## Kobe Shoin Women's University Repository

Title	共通感覚におけるイメージ用語の文化的特性—日本女性の洋装におけるイメージ用語を中心に A Study on Cultural Property of Image Words Based on Common Sense: Image Words for Western Cloths in Japanese Woman
Author(s)	徳山 孝子 (TOKUYAMA Takako)
Citation	神戸松蔭女子学院大学研究紀要人間科学部篇 Journal of the Faculty of Human Sciences, Kobe Shoin Women's University , No.1 : 75-81
Issue Date	2012
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

# 共通感覚におけるイメージ用語の文化的特性 ——日本女性の洋装におけるイメージ用語を中心に

徳山 孝子

神戸松蔭女子学院大学人間科学部

Author's E-mail Address: tokuyama@shoin.ac.jp

---

## A Study on Cultural Property of Image Words Based on Common Sense ——Image Words for Western Cloths in Japanese Woman

TOKUYAMA Takako

Faculty of Human Science, Kobe Shoin Women's University

キーワード：色、服飾文化、イメージ、シック、いき

Key Words: color, clothing culture, image, chic, IKI

### 1. はじめに

我々は、服装の色や形をイメージで捉えている。イメージという言葉は、辞書で調べると「心像・表象」と意味づけられている<sup>1, 2, 3, 4</sup>。イメージとは「表象の形態であり、外的世界を心の中に表示するシステムである」とも記載されている<sup>5</sup>。イメージは、言葉で表現できないような感覚的・感情的な印象を伴うものである。が、小説・雑誌・新聞等は、イメージを的確に伝えようとしている。その中でファッション雑誌では、デザイン・スタイル・色・柄等多種多様にあるイメージを言葉に置き換え伝達している。その言葉は、社会的・文化的な規制を受けながら自己と他者の共通の感覚を生み出そうとしている。

イメージと言葉の関係については、文化・時代・環境等によって各個人に差異が見られ、あいまいなイメージを他者にどのように伝えるのか、他者のイメージをどのように受け取るのか、イメージを表現する言葉についての関心は高く、現在使用されている言葉よりもより明確な言葉でイメージを表現しようとしている。イメージを表わす言葉は、時代によって異なり、永続的に使用している言葉、新たに産み出される言葉、死語になった言葉がある。言葉は、時代によって変化しているが、自己と他者の共通の感覚を持つイメージの言葉が文化として定着しているのではないかと考えた。

イメージに対する言葉の研究は、これまで数多くの報告がある。今までの研究に使用した服装評価用語は、アパレルの専門家が用いている特定の専門用語<sup>6</sup>、辞書やファッション雑誌から抽出して分析した用語や経験的に抽出した用語<sup>789</sup>等がある。さらに、言語による被服の色彩設定システムの開発も進められている<sup>10</sup>。「言葉の違いは、イメージの違い」と小林<sup>11</sup>は考え、イメージを明確に表現する形容詞約 180 語を出来るだけ集め、言語イメージ・スケールに分類した。ここでは、洋装を評価する用語の研究ではなく、イメージを表現する言葉が文化として定着している言葉があるかどうかである。

ファッション雑誌のデザイン・スタイル・色・柄等のイメージを表現する言葉は、膨大にある。そこで色のイメージを表現する言葉を中心に検討した。ここからは、色のイメージを表現する言葉をイメージ用語として示す。

本研究では、イメージ用語を時代別に分析し、永続的に使われている言葉を抽出するとともに、その言葉を体系化し、社会的背景にどういう意味があるのか。日本女性の洋装のイメージを表現している言葉は、時代を超えて定着している事実を明らかにすることを目的とした。

## 2. イメージ用語が記載されている資料の選択

日本の風土・環境のなかで我々は、日常生活の経験によってイメージ用語として身近に使用している。言葉は、普段意識する・しないに関わらず現在の生活に浸透している。イメージは、時間の経過とともに変わるように言葉も変化している。

服装を評価する用語は、服装を描写する基本的用語として永続的に使用されているもののほかに、その時どきの社会状況に応じて産み出されたり、あるいは衰退して死語になるものもある

と述べられている<sup>12</sup>。永続的に使用しているイメージ用語は、自己と他者との共通感覚を明確にしている。共通感覚は、時間の経過によって捉えることができる。社会的に信頼度の高い用語は、活字になっている新聞・文学・雑誌等が挙げられる。永続的に使用している用語を抽出するには、規則的に出版している婦人雑誌が適切と考えた。

婦人雑誌のなかで「婦人画報」<sup>13</sup>は、明治 38 年 7 月 1 日創刊以来、一時期雑誌名は変わったものの休刊することなく現在まで発行し続けている唯一の雑誌である。「婦人画報」は、時代の流れを読み、色の流行の変化を感じ取ることができる雑誌である。このような理由で時間の経過とともにイメージ用語を検討するには「婦人画報」が最適であると考えた。「婦人画報」は、現在まで続いているなかで昭和 30 (1955) 年ごろから洋装の流行が掲載されるようになった。今回は、女性の洋装を中心とした色の言葉を検討するため、昭和 5 (1930) 年から平成 7 (1995) 年の 5 年間隔で 1 月号から 12 月号までの雑誌を検討した。2000 年以降のイメージ用語は、次の論文に譲ることにした。「婦人画報」は、国立国会図書館 (東京)、財団法人大宅壮一文庫 (東京)、財団法人阪急学園池田文庫 (兵庫)、愛知県立図書館 (愛知) に保存してある雑誌を用いた。そのなかで昭和 20 (1945) 年は、戦時中のため「婦人画報」ではなく「戦時女性」として出版されていたが、保存がなく欠号している。さらに、昭和 10 (1935) 年 10 月号、昭和 40 (1965) 年 1 月号と 6 月号も欠号である。

### 3. イメージ用語の抽出方法

イメージ用語の抽出方法は、次のように行った。たとえば、「縞や斑点のある平凡な色の毛皮が……（1935年1月号）」と記載されている文章のなかから色の表現する言葉を「平凡な」として取り上げた。「深みのあるカーキ色でまとめられた（1990年1月号）」（以下、本稿の下線はすべて筆者）では、「深みのある」を取り上げた。たとえば、言葉のなかには「濃い」「薄い」「濃淡な」がある。「濃い」「薄い」「濃淡な」は、同じイメージ用語とも解釈できるが、文章中のイメージ用語を抽出しているため、文章の内容が異なっているものは、各それぞれに意味のある言葉と判断した。次に、文章から抽出した言葉を時代別に分類した。

### 4. イメージ用語から読み取る文化的特性

昭和5（1930）年から平成7（1995）年まで使用していたイメージ用語は、5年ごとに列記した。言葉は、時代によって同じ言葉を何度も使用している。ここでは、言葉の使用回数を求めるのではなく、時間の経過に重点をおいているため、数回または一回でも使用していれば時代と何らかの関係がある言葉と判断した。さらに、昭和5（1930）年から平成7（1995）年までの間で約30年以上<sup>14</sup>使用している言葉は、永続的に使用していると判断した。

昭和5（1930）年から平成7（1995）年までのイメージ用語は、154語使用していた。我々は、154語を認識する時、女性の洋装のイメージを意識的にせよ無意識にせよ、個人差があるにしてもある社会に共通しているイメージ用語であった。その共通した言葉を分類体系化することによって文化を読み取ることができると考えた。文化を読み取るためには、時間的経過を考える必要がある。永続的に使用しているイメージ用語は、154語の中で45語であった。45語は、客観的・主観的に表現できるイメージに分類できた。客観的に分類できる言葉は、指示対象物の各瞬間の状態をある数定値によって完全に定めることができる。その用語は、明るい・鮮やかな・暖かい・甘い・薄い・大人の・くすんだ・暗い・濃い・沈んだ・渋い・強い・濃淡な・微妙な・深みのある・柔らかいが挙げられた。一方、主観的な言葉は、感情等を伝達する抽象イメージである。その言葉は、秋らしい・美しい・落ち着いた・可愛い・強烈的な・奇麗な・個性的な・冴えた・爽やかな・自然な・シックな・地味な・洒落た・上品な・洗練された・大胆な・調和した・ナチュラルな・はっきりした・派手な・華やかな・春らしい・品のよい・目立つ・優しい・優雅な・ロマンティックな・若々しいであった。

たとえば「鮮やかな」は、「赤、緑、黄、ブルーがかった紫、藤ねずみ、茶などの鮮やかな色合いが……〔昭和5年9月〕・黒色や銀色のあざやかなブロードテール……〔昭和10年1月〕・鮮やかなパープルが印象的なコート……〔平成2年12月〕・鮮やかなオレンジのタフタ素材……〔平成7年2月〕」が挙げられる。「鮮やかな」は、客観的に捉えることができるため、昭和5年から現在にいたるまで表現の方法が同じで一定の基準を持っている。一方、「派手な」は、昭和10（1935）年5月号に「……派手な色物が現れ……，……紺でも淡紅でもお派手に……，……赤でも青でも派手なもの……」という抽象的な使われ方をしている。このように明確な基準をもつもの、抽象的なものは、それぞれ言葉の文化を持つ固有の意味

体系があるのではないだろうか。意味体系を考えるため、各月刊号にも使用されている言葉を抽出した。各月刊号に使用された時代を超える言葉は、「明るい・鮮やかな・淡い・濃い・シックな・地味な・濃淡な・派手な・柔らかい」であった。「明るい・鮮やかな・淡い・濃い・濃淡な」は、日本色研配色体系の色調を表わす言葉である。「柔らかい」は、視覚だけでなく触覚に関係した言葉である。このような言葉は、物理的特性を持ち、数値的に評価できるものである。しかし「シックな・派手な・地味な」は、抽象的なことばであり、文化的に何らかの意味が含まれ、日本女性の感性と関係があると考えられる。特に「地味な」や「派手な」は個人的感覚と深く係わる用語である。このような用語が時代を超えて定着している事実は、自己の視点と他人の視点とのつり合いのもとに洋装が評価しているとも理解できる。

「シック」には、どういう意味が含まれているのであろうか。昭和10(1935)年5月号には「……シックな配色……, ……シックな若さを添えた配色……, ……やっぱり何をいっても一番シックでございます……」のように抽象的な表現で使用している。「シックな」について、社会的背景を踏まえながら「シック」に込められている意味を検討する。「シック」という語彙を辞書で調べると

「粹な、洗練された、という意味。上品で、趣味よく、エレガントよりも知性を感じさせる装いを表現するときに、このことばを使うことが多い」<sup>15</sup>

「おもに婦人の衣服や装いについての総合的なほめことばとして用いられ、いきと上品さが適度にあり、受ける感じがひじょうに洗練されており、あかぬけていることをいう」<sup>16</sup>と記述している。一般的に「シック」は、いきと訳される場合が多い。『「いき」の構造』では、「シック」を次のように説明している。

決して「いき」ほど限定されたほどではない。外延のなほ一層廣いものである。即ち「いき」をも「上品」をも均しく要素として包攝し、「野暮」「下品」などに對して、趣味の「纖巧」または「卓越」を表明してゐる<sup>17</sup>。

シックは「外延のなほ一層廣いものである」というように「いき」ほど限定がなく、「いき」よりもっと上品な言葉である<sup>18</sup>。九鬼周造は「それを包括する類概念の抽象的普遍を向觀する「本質直觀」索めてはならない」と述べている<sup>19</sup>。『「いき」の構造を読む』では、「いき」よりも上にくる普遍的な概念に向うようなそういう本質を直感するということを索めてはならない」と説明している<sup>20</sup>。一方、「シック」は、「1830年代かつての華やかな宮廷貴族趣味への郷愁を踏まえ、本来の意味を超えて認識されるに至ったものであろう」と『日英仏独対照服飾辞典』では説明し「常に巧妙さがつきものであって、未熟さとは無縁であり、一方そこには主張すべき独自性が不可欠の要素になっている」と意味づけている<sup>21</sup>。このように「シック」は、「いき」より上品で尚且つ、巧妙な技巧をもっていると解釈できる。「シック」は、語彙の意味や文化的な側面からも一定のレベル以上のものを兼ね備えていることが見出された。

さらに、社会的背景から「シック」を検討した。『「いき」の構造』は、昭和5(1930)年出版され、婦人雑誌に「シックな」という言葉が登場するのは、昭和10(1935)年ごろである。昭和5(1930)年～昭和10(1935)年ごろは、百貨店・洋裁店・靴店・銀座にハリウッ

ド美容室の開店、ニナ・リッチ開店等、洋装化の波が押し寄せ、一般庶民もおしゃれに関心を持つような風潮であった。婦人雑誌では、洋装の記事に「いき」という言葉を使用することが少なくなった。洋装化とともにイメージを表現する言葉は「いき」から「シック」へと転化していったと考えられる。「いき」は和服のイメージになっていったのであろうか。音楽の分野からも「シック」について検討した。流行歌の歌詞に「いき」と「シック」が含まれている曲を取り上げた。昭和8(1933)年の流行歌『東京祭』(詞門田ゆたか・曲古賀政男)「粋な浅草 夜更けの月は どこか似てます・・・・」昭和14(1939)年『旅姿三人男』(詞宮本旅人・曲鈴木哲夫)「……粋な小政の粋な小政の旅すがた……」昭和26(1951)年『東京シューシャインボーイ』(詞中田誠一・曲佐野金助)「サーサ皆さん 東京名物 とってもシックな靴みがき 鳥打帽子に胸当てズボンの 東京シューシャインボーイ……」昭和27(1952)年『お祭りマンボ』(詞、曲原六朗)「……イキな素足のしほりの浴衣……」昭和35(1960)年『潮来笠』(詞佐伯孝夫・曲吉田正)「……粋な単衣の 腕まくら なのにヨー……」と当時流行った歌謡曲の歌詞である<sup>22</sup>。昭和26(1951)年に「シック」が登場すると「いき」という言葉は、和装に対する言葉に置き換わっていることがわかる。流行歌の中に「シック」という言葉が登場することは、社会的に「シック」が昭和26(1951)年ごろに定着したとも考えられる。「シック」は、洋服を着用する時になくてはならないイメージを表現する言葉になっていった。この言葉は、昭和10年ごろから現在まで使用している事実は、半世紀以上イメージを表わす言葉として我々に植え付けられていることと同じである。現在「シック」は、次のように使用している。

「……黒地や紺、生成りのシックな色柄も多い。……………浴衣を上手に着こなせる人が増えてきました。粋 (いき)に見せるコツは、丈をちょっと短めに着ること。

その方が歩きやすくて涼しそうに見えます」とアドバイスしている<sup>23</sup>。

朝日新聞に掲載された一説である。「シック」は、社会的背景からも時代を超えて定着したと考えられる。

「シック」は、「いき」以上の何か一定の高いレベルを持ち、昭和初期から現在に至るまで、イメージを表現する言葉の意味は変化することなく使用している。「シック」は客観的・論理的基準によって順序づけて考えることができるのではないだろうか。よって、物理的特性だけでなく抽象的な言葉でも語彙の意味や社会的背景から客観的に取り合うことができ、時代を超えたイメージを表現する言葉、すなわち文化的特性と位置づけられる。現在は「シック」ということばだけであるが、今後「シック」のように抽象的であっても何らかの意味が含まれ、社会的背景を踏まえ文化として定着する文化的特性の言葉が増えて来ると考えられる。

## 6. 終わりに

イメージ用語を時代別に分析し、その言葉の体系化および社会的背景とともに意味付けることができた。昭和5(1930)年から平成7(1995)年までのイメージ用語は、154語使用していた。154語の中で永続的に使用していたイメージ用語は、45語であった。45語は、客観的・主観的に表現できるイメージに分類できた。抽象的なものは、言葉の文化を持つ固有の



意味体系があることがわかった。時代を超え、定着している言葉は「明るい・鮮やかな・淡い・濃い・シックな・地味な・濃淡な・派手な・柔らかい」であった。「明るい・鮮やかな・淡い・濃い・濃淡な」は、色の色調と関係していた。「柔らかい」は、視覚だけでなく触覚に関係した言葉であり、物理的特性を持つものであった。「シックな・派手な・地味な」は、抽象的で文化的に何らかの意味が含まれ、日本女性の感性と関係があると考えた。特に「地味な」や「派手な」は個人的感覚と深く係わるイメージ用語であった。「シック」は、「いき」以上の何か一定の高いレベルを持ち、昭和初期から現在に至るまで、イメージ用語の意味は変化することなく使用していた。時代を越えたイメージ用語は、物理的特性だけでなく文化的特性から客観的に取り扱うことができた。時代を越えたイメージ用語は、物理的特性を経験の言語 (Lenneberg & Roberts, 1956; Lenneberg, 1967)<sup>24</sup> に相当し、文化的特性を時代とともに構築された抽象的な言葉から位置づけられることができた。時代を越えたイメージ用語は、物理的特性と文化的特性から自己と他者の共通感覚を認識していることが明らかになった。

## 引用文献

- 1) 宮城音弥：『岩波心理学小辞典』岩波書店，1979
- 2) 岡本夏木，清水御代明，村井潤一：『発達心理学辞典』株式会社ミネルヴァ書房，1995
- 3) 金子隆房，台利夫，穂山貞登：『心理学辞典』教育出版株式会社，1991
- 4) 外林大作，辻正三，島津一夫，能見義博：『心理学辞典』誠信書房，1981
- 5) 大島尚：『認知科学』株式会社新曜社，1986
- 6) 磯井佳子，小田順子，風間健，織学誌，45，5（1989）
- 7) 藤原康晴，川端澄子，近藤信子，家政誌，41，3（1990）
- 8) 渡辺澄子，川本栄子，中川早苗，家政誌，42，5（1991）
- 9) 渡辺澄子，川本栄子，黒田喜久枝，中川早苗，家政誌，44，2（1993）
- 10) 清水義雄，藤原昭則，古川貴雄，佐々木和也，近田淳雄，棟方明博，織学誌，48，5（1992）
- 11) 小林重順：『カラーイメージスケール』株式会社講談社，1998
- 12) 藤原康晴，川端澄子，家政誌，40，4（1989）
- 13) 「婦人画報」は、衣食住を中心に女性の新しい生活技術を追求する目的にて、明治38年7月1日発行した。現在、婦人画報社より出版している。
- 14) 昭和5（1930）年から平成7（1995）年の65年間で半分の年月が経過しているイメージ用語を永続的に使用している用語とみなした。
- 15) 山口女子文編：『実用服飾用語辞典』文化出版局刊，1989

- 16) 田中千代：『新田名千代服飾辞典』同文書院，1991
- 17) 九鬼周造：『「いき」の構造』岩波書店，1930
- 18) 安田武，多田道太郎：『朝日選書『「いき」の構造を読む』』朝日新聞社，1979
- 19) 上掲：注 17
- 20) 上掲：注 18
- 21) 石山彰編：『日英仏独対照服飾辞典』ダヴィッド社，1972
- 22) 古茂田信男，島田房文，矢沢寛，横沢千秋：『日本流行歌史上中下』（株）社会思想社，1994
- 23) 朝日新聞（朝刊）：「浴衣美人増えています 色や柄も多様化、女心誘う」1997.6.30
- 24) 福井勝義：『認識と文化一色と模様の民族誌』財団法人東京大学出版会，1991  
経験の言葉というのは「ある種の物理的特性の感覚そのものを記述する類の語」である。  
(Lenneberg, 1967, p368)

（受付日：2012. 1. 10）